

論 文

# ハルビンにおける満洲移住の 日本人についての考察

—— 竹内正一「風俗國課街」を中心に ——

周 秋 利

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Consideration of Japanese immigrants to Harbin in Manchuria  
—— Focusing on Shoichi Takeuchi's *Gogol Street of Russian-style*

Zhou Qiuli

**Abstract:** The Japanese literary works with Harbin in Manchuria as an urban representation are mainly recorded in the form of travel notes. In this paper, we will focus on the short story *Gogol Street of Russian-style* by Shoichi Takeuchi to investigate the different representations of Harbin and the Japanese in Manchuria. Through his works, in the “Manchukuo” era, according to the image of *Gogol Street of Russian-style*, the culture brought by foreigners or people of other ethnic groups in Harbin was divided more clearly. Additionally, the Japanese in “Manchukuo” became more active and conscious of adapting to this land by the political propaganda at that time. The Japanese who immigrated into “Manchukuo” were caught in a national identity crisis. Unlike the Russians who immigrated to Manchuria had a negative identity, Japanese people in “Manchukuo” had a positive identity, which made this group of Japanese find a sense of stability and a sense of belonging to Manchuria. Furthermore, both colonialists and the public have lost the right to control their lives and freedom in a state of war. Helplessness and dissatisfaction are expressed through Takeuchi’s works. Although *Gogol Street of Russian-style* is a National Policy Literature, it reveals Takeuchi’s criticism and reflection on war.

**Keywords:** Manchurian literature; representations of Harbin; the Japanese in Manchuria; National identity crisis; criticism and reflection on war

## 1. はじめに

「風俗國課街」は『新潮』第39年第9号に掲載され、1942年（昭和17年）9月1日に新潮社から出版された竹内正一（1902-1974）の作品である。この作品は1944年8月に出版された短編小説集『向日葵』（新京近沢書房）に収録された。400字詰め原稿用紙に換算すると約49枚の短編小説である。

物語は上中下の三つの部分から構成されている。「上」では、亮造と美保の夫婦は日本の学校にいるうちに、二人のみの勝手な結婚をし、それからさんざん苦勞をした末にハルビンに来て、ようやく会社員として働いている。彼ら夫婦には貸間探しという独特のゲームがあった。このゲームの主唱者は常に美保であり、夫の亮造は意欲的ではなかったが、妻に協力した。それは、ある時はユダヤ人の貸間であったり、ある時は道外あたりの、中国人の物持ちの貸間であったり、ある時は中日戦争開始後にできた日本人の急造アパートであったりした。当時夫婦は埠頭区の端のほうに住んでいたが、美保は居住環境の悪さと冬の寒さから逃げ出したいため、馬家溝方面まで行ってみると提案した。実際、亮造夫婦の住居は一度も埠頭区を離れたことがなかった。しかし、亮造はじっくり考えて、引っ越しに同意した。「中」では、その翌日、亮造は会社の都合で一日勤務しなければならなかったため、せっかちな美保が一人で南崗区に行き借家を探す。そこへひょっこりと南崗の鉄道会社の現場に勤めていた美保の弟の啓助が現れた。啓助は自分の助けがあれば、美保が馬家溝方面で楽に良い家を探すことができると大言壮語する。しかし、思うようにはいかず、様々な曲折を経て、やっとのこと周旋屋の助けを借りて部屋を見つけた。部屋は広々としていたが、やはり寒かった。「下」では、天気が暖くなるにつれて、美保はついに部屋を整理できる。日本の生活から逃れるようにしてこのハルビンに辿り着いてもう六七年、亮造夫婦は今やっと落ち着いたと感じた。しかし、ようやく安定した日々も長くは続かず、弟の啓助が西南の「国境」に近いあたりに突発した「政治的問題」で、急に仕事の応援を求められたのである。最後に亮造夫婦は駅まで出張先へと向かう啓助を送って行った。命懸けの出張のため、見送りが随分多かった。亮造夫婦はそれぞれ思いに耽りながら黙りがちに家へ帰るのであった。以上が「風俗國課街」の物語の内容である。

従来、日本人作家によって書かれた満洲におけるハルビンを都市表象にした文学作品は、主に旅行記として見聞を記録したものであった。例えば、林

芙美子の書いた満洲に関する文学作品の中には、国際都市ハルビンの風景と風物を描いたものがある。当然、林芙美子は異国情緒に満ちたハルビンで暮らしていた人間（踊り子や日本開拓民等）にも注目した。また、学界では小越平隆の『満洲旅行記』（一名：『白山黒水録』）が史料として研究する価値があると評価された。『満洲旅行記』には、ハルビンに関する情報が記述されている。近年、満洲文学作品の整理により、竹内正一の文学作品も次第に研究者に注目されるようになった。例えば、呉佩軍における「竹内正一が描いたハルビンの都市表象－『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』－を中心に」によると、植民都市ハルビンにおける政治権力の変動に伴う資本権力の交代と都市空間の分裂状態が分かる。その上、呉佩軍はハルビンにおける民族的・階級的差別及び被支配民族であった白系ロシア人と中国人の生存状態について考察した。一方「風俗国課街」は、岡田英樹によって書かれた『「満洲国」の文学とその周辺』の第7章『大連イデオロギー』の体现者・竹内正一において、平凡を絵にかいたような日本人夫婦の日常を淡々とつづった作品と評価した。その上、岡田は作品中で最後に挿入された弟啓助の命懸けの出張というエピソードを通して、当時の政治的緊張感が表現されていると指摘した。また、竹内正一という作家の創作スタイル、すなわち傍観者としての姿勢に変化はないと解釈された。

筆者も、先行論と同じく、「満洲国」時代におけるハルビンは都市空間が分裂状態になっていたと考えている。しかし、「馬家溝」という文学作品においては、主人公である中国人の視点で、短い文章表現を使い、高級商業区の道裡と馬家溝という河の畔にある中国人部落の差の大きさを示すことによって、植民主義者と非植民者の対立、都市空間の分断を表した。それに対して、「風俗国課街」という作品は日本人夫婦の部屋探しを通して、長い文章表現を使い、異なる南崗の馬家溝方面の表象を描いた。それゆえに、南崗の馬家溝方面という同一空間の中に、高級住宅地の周辺に関するスケッチを論じることが必要だと考える。また、支配民族としての普通の日本人による満洲体験及びその時代に犠牲になった事物への観点についても考察すべきである。

「風俗国課街」では、幾多の曲折を経てハルビンへ移住した日本人夫婦がはじめて馬家溝方面へ引っ越した。そのことによって、在滿白系ロシア人とは異なる「住めば都」という思いが生じた。夫婦は落ち着いたようだと感じたが、「国」のため前線に出張しなければならなくなった妻の弟は無意識のう

ちに「時代に必要な一人」となった。本研究では竹内正一における「風俗國課街」という短編小説を中心に、主人公のハルビンでの満洲体験を通して、ハルビンの表象を考察する。また、物語の展開に伴い、満洲へ移住した日本人の民族的・国家的アイデンティティクライシス<sup>1</sup>についても検討したいと思う。さらに、時局に遭遇した日本人の青年たちを見送る場面から、竹内正一の戦争に対する反省をも窺い知ることができると思う。

## 2. 竹内正一とハルビンの繋がり

地名としての満洲とは現在中国の遼寧省（かつての盛京省または奉天省）、吉林省、黒竜江省、および内モンゴル自治区の一部を指す。吉田忠雄の研究によれば、「満洲への日本人移民は、日露戦争後からはじめられたということが定説となっているが、少数ではあろうが、それ以前にも日本人は定住していたもようである。」<sup>2</sup>つまり、日露戦争の勝利により、日本が満洲で多くの利権を獲得するのに伴い、満洲に移り住む日本人は増えたとは言える。しかし、「在満日本人の人数は大きくは増えず、第一次大戦前では10万人程度であった。」<sup>3</sup>1914年に勃発した第一次世界大戦後の不況、すなわちいわゆる大義名分となった日本人の人口過剰の抑制が理由で、満洲への移住の圧力が急速に高まった。<sup>4</sup>そのうえ、昭和十四年十二月二十二日（1939年12月22日）の閣議決定によって、「満洲開拓政策ハ日滿兩國ノ一體的重要國策」<sup>5</sup>が基本方針とされた。日本から満洲への移住が日本の「国策」となったため、満洲へ移住した日本人はより一層多くなった。終戦時の在満日本人は、約150万人と言われている。<sup>6</sup>

満洲の中心は現在中国の吉林省長春市であり、長春を中心として南満、東満、西満、北満に分かれていた。北満におけるハルビンは1898年に露清密約によって、帝政ロシアの東清鉄道敷設に伴い、人口希薄な荒野が広がる松花江畔にはじめて建設された大都市であった。北満の平原を列車で横切って見るハルビン市はまるでヨーロッパの都市のようであった。1917年のロシア革命以後、ハルビンにおいてロシア人勢力は絶対的優位性を失っていた。山本有造の調査によれば、ハルビン市における行政権の交替が次のように紹介されている。「1917年から1920年にかけて、軍事・警察権を中国側が順次回収した。（中略）1932年には日本軍が哈爾濱を占領し、都市経営の優越権を握った民族が交替した。しかし、このように市の行政を担当した民族が入れ替わる

うとも、哈爾濱は国際都市と言われ、多民族多文化が競い合う都市であった。」<sup>7</sup>

ハルビンは、日本人とロシア人にとって、好感を持てる都市というのが一般的な印象であったと考えられる。1936年12月末現在のハルビンの総人口は464,812人であり、その中に27,992人の白系ロシア人がおり、6,561人のソ連国籍者とそのほかの2,450人の外国人がいた。そして、32,472人の日本人（内地人）と6,679人の日本人（朝鮮人）がおり、388,658人の中国人の住民がハルビンに住んでいた。<sup>8</sup>ほかの主要都市及び各省城総人口<sup>9</sup>の統計から見ても、ハルビンは国際都市の色彩が濃厚であったことが分かる。それゆえに、当時の日本人にとって、ハルビンは西欧文化への「北の窓」として、特別な意味をもつ都市であった。

このような背景の下で、ハルビンにおいて各国の文学者が数多くの作品を創作した。例えば、「満洲国」時代の有名な日系文学者として「竹内正一（1902-1974）は『北満』文壇の旗手・『満鉄』植民文化事業の指導者・文芸雑誌の運営者の身分を兼ねて、文学創作・図書館の管理・雑誌編集などの活動を行っていた。」<sup>10</sup>竹内正一<sup>11</sup>の経歴を見ても分かるように、彼は北満におけるハルビンに定住していたことがあるため、彼の文学作品は大部分がハルビンを背景として創作された。岡田英樹によれば、当時の評論家浅見淵はこう指摘しているという。「竹内正一は、文学における傑れた一種の風景画家である。北満の北欧風な相貌を帯びた異国的風物から、詩的哀愁溢れた場（マ）景（マ）を切取って来て、清澄な美しき三色版として作品に展開する。」<sup>12</sup>それゆえに、「風俗國課街」において、ハルビンの南崗地区及び馬家溝方面の周辺をスケッチすることができたのである。

### 3. 「住めば都」

#### 3.1 見慣れぬ南崗の馬家溝方面

「風俗國課街」において、主人公である日本人の亮造夫婦は引っ越しすることをスポーツかゲームかのごとくよくしていた。その独特のゲームは彼らが金持ちであるからではなかった。今回埠頭区から町外れの方へ引っ越した理由は、作中における亮造の独白からわかる。

だがこの餘り清潔とも云へず、また便利とも云へない小さな薄暗いアパ

ート住ひに、勿論満足してゐる譯でもないのだからと思ふと、同じくらみの家賃で馬家溝界限に小ぢんまりした仕舞家を借りられれば、これに越したことはないのではないかと考へられてくるのだつた。(中略) この節では同じ埠頭區のなかで、彼等夫婦の生活で負擔できさうな家賃の家がさうざらに空いてゐるとは思へない。さうなればどうしても引越すとすれば馬家溝の方面にでも探すより仕方がないと云ふことになつてくる。「風俗國課街」、129頁。)

駅と商業施設に近いほど家賃は高くなるというのは、以上の引用した内容により、「満洲国」時代のハルビンにおいて埠頭区(プリスタン)は馬家溝界限より経済が発展していたと考えられる。実際に埠頭区は港と中心商業地として繁栄していた。一方、1898年にはロシアによって駅を中心とする南崗の一帶でも都市計画がなされ、ロシアの大きな影響を受けた。その上、1917年のロシアの十月革命後、満洲へ亡命したロシア人は馬家溝で大規模な建設を行うこともあった。南崗地区において、ロシア人によって建設されたのは高級住宅地であった。緑化や街の風景などが整備され、優れた住環境が整っていた。その特徴は「満洲国」時代においても変わらなかった。「風俗國課街」においても、美保と弟の啓助が一緒に手頃な家を探している時の情景として、「成程林のなかの街とでも云つた、庭の廣い樹の多い静かな住宅街を縦横に歩き廻つた。」<sup>13</sup>のようにきれいな環境が描かれている。1917年までに、埠頭区と南崗地区はロシア帝国の中東鉄道附属地の一部分として特殊な地位を占めていた。二つの地区は鉄道線路によって区切られ、線路は木造の橋(現在の霽虹橋)の上を通っていた。竹内正一は埠頭区と南崗のつながりを以下のよう

埠頭區から來る電車が、南崗の百貨店秋林の前を直角に曲ると一気に高臺を下つて、雨期以外にはいつも水の少い馬家溝河の危つかしい木橋を渡つて國課街の通りに入る。この邊りから教堂街の四つ角までの間が、この附近の商店街として馬家溝では目貫の通りだ。「風俗國課街」、136頁。)

また、埠頭区は左側通行で、南崗地区は右側通行であった。すなわち、自動車や馬車がこの二つの地区を結ぶ橋の上を渡る時は、自分で交通ルールを調整する必要があった。<sup>14</sup>それゆえに、普段殆ど埠頭区の中で暮らしていた主人公の美保にとっては、南崗に着いた途端に自身が見知らぬ環境に置かれた

ような感覚が以下のように生じた。

同じ哈爾濱市内だと云ふのに、とんでもない遠くの方へでも連れて行かれるやうな、一抹の不安をさへ覚える程、長い間電車で揺られた末と言っても、実際の時間にしてみればものの三十分か四十分のことだらうが、日頃全く見馴れない街筋を矢鱈と曲つたり、長い坂を登つたり下つたり、橋を渡つたりして行くと、だんだん街の様子が變つて、建物など粗末になつてくるのが、一層心細くもなつてくるのだつた。(中略) 埠頭區の目貫きの道などに比べては、電車道に沿つた表通だと云ふのに、家並も低く建物も見窄らしく、その癖に満人や露人の行き來や、流しタクシーやトラツクの往来だけは狭い道に織るやうだつた。美保は思はず邊りを眺め廻して、一瞬間他國へでも連れて來られたやうな侘しさに打たれ、(中略)「これ馬家溝の秋林。ここら馬家溝で一番賑かなとこや。」(「風俗國課街」、131頁。)

ここでは二つのことに注意したい。一つ目は、竹内正一は満洲へ移住した日本人の「異国感」という体験を強調して、ハルビンにおける埠頭區と南崗地区の違いを浮き彫りにした点である。二つ目は、従来現実主義文学を創作し続けていた竹内正一には、ハルビンの表象をテーマにした文学作品がいくつかある。例えば、「風俗國課街」、「馬家溝」等。では、本研究の中心となる國課街はなぜ竹内正一に注目されたのか。ポイントは「風俗」という特徴であると考えられる。「國課街は露西亞の有名な文人の名前をとつて付けたゴーゴリスカヤを漢字に當てはめたものらしい。」<sup>15</sup>という地名の由来である。つまり、ロシア式な風俗は國課街に深い影響を与えた。主人公の亮造夫婦の新しい家は國課街も外れに近い所であつたため、近くにあるハルビンの最大の百貨店秋林の周りの表象に注目した。作中では、秋林近辺で暮らす人間の社会生活が浮き彫りにされている。例えば、秋林の角に置かれた二、三脚のベンチでひどい天気でもない限り、いつでも雑談に余念がなかつた暇人たちがいる。あるいは中国人の乞食者にいくらかでも喜捨をした相当年をとつたロシア人の女もいる。また、商売がうまく行かなかつた中国人の靴磨きなども描かれている。このような一連の描写によって、ロシア式な風俗國課街を読者に示した。

以上のことを踏まえると、ロシア人は満洲移住に伴い、彼らの文化をハルビンに移植することに成功したとも言える。それに対して、日本人は満洲移住に伴い、ハルビンでその異文化に満ちた街に身を置いて、それが見慣れた

「異国感」という感覚となった。要するに、先行研究と結びつけて考えると、「満洲国」時代、植民都市ハルビンでは都市空間の構造が植民主義者と非植民者、上層階級と貧民階層の対立によって分裂した。<sup>16</sup>のみならず作中の主人公のような満洲へ移住した日本人の満洲体験を通して、異国或いは異民族の人間のもたらした文化も分裂状態になっていたことが分かる。このような文化上の分裂状態はハルビンにおいて外国人と異民族の間で、お互いに文化干渉はしなかったことに起因する。それゆえに、それぞれの民族は他民族の文化に浸った時、「別の世界」や「他国」といったような錯覚を起こした。かえって、各国或いは各民族の人間がハルビンという土地で共存することができたのである。更に、ハルビンも満洲における国際化された都市になった。

### 3.2 苦境中の苦闘

「風俗國課街」の主人公である日本人の亮造夫婦がしばしば引っ越しする理由について、それは「満洲国」において借りられる空室が多くなったというためだろうか。しかし、実際には、1937年末頃から、「満洲国」における住宅難という問題が始まっていた。この実態について、竹内正一は以下のように表している。

併し最近二三年、人か急に殖えたせぬか、亮造夫婦が哈爾濱に來た當座のやうな、そんな氣儘勝手な轉宅はだんだん困難になつて來た。滿洲のどこの都會でもさうであると同じやうな原因から、北鐵接收後一時可成り緩和されてゐた住宅難の聲が再び盛んになつてくるやうだつた。（「風俗國課街」、127頁。）

平山剛の調査によれば、満洲産業開発五カ年計画の開始及び中日戦争による計画の改定以降、「満洲国」の主要都市では政府官吏や特殊会社などの増員という人口の大量流入に伴い、1937年末頃からは初めて住宅難が問題になった。<sup>17</sup>それゆえに、この問題も「満洲国」へ移住した普通の人間にとって、生活上の苦境であったと言える。「風俗國課街」において、主人公の美保の考えに「もうこれ以上探してもこの時節にさう安くて便利な家が有りさうもないことが分かつて來てゐたので、たうとうこの家を借りることに決心して手金を打つて歸つた。」<sup>18</sup>とある。しかし、新しい借屋も前と同様に冬の寒さの問題に直面していた。あらゆる手段を講じようと試みても、温かくならなかった。最後にかろうじて冬を過ごし、もう寒さも一息だと思っていた亮造夫

婦はほっとしたような気持ちになった。そのため、亮造夫婦は以下のように「満洲国」における支配民族の一員としての普通の日本人の感想を表している。

いまの境涯ではそれくらゐが美保にとつては最も楽しい空想だつた。僅かばかりの旅費と一枚の紹介状を頼りに、夫婦してはるばる苦しい内地の生活から逃れるやうにこの哈爾濱に辿りついてもう六七年、夫の亮造はそれから二度程職を變へた擧句幸ひいまの會社で、どうやら落着いたらしい今日この頃は、「僕もやつと満洲の人間になれさうだ。」と、それも聞きやうによつては自嘲とも取れさうな調子だが、本音は案外大した悔ひもなく現在の生活に一應の安堵と信頼を置いてあるもののやうに思はれた。これ以上はいまの暮しをしつかりと固めてゆき、それを少しでも豊かなものにして行ければ良いのだと、言葉の端々でふと美保に洩らすこともあつた。さう云ふ亮造の述懐は美保にも分からない筈はなく、そして自分もできるだけ、この土地に馴染み、この國の生活を心から自分のものとしてゆきたいと考へるのだつた。それには多少の意識的な努力もあつたかも知れない、また住めば都といふ諦感に似た氣持も無いでは無かつたかも知れないが、それでも思ひがけない満洲の、と云つても他の土地は知らない美保だが、この哈爾濱の四季の暮らしのうちに、いつしか強い愛着を感じることができるやうになつたことは、何と言つてもこの夫婦の氣持を落着かせるものがあつた。(「風俗國課街」、141-142頁。)

ここでは三つのことに注意を払いたい。まず、亮造夫婦は日本での苦しい生活から逃げようという理由で満洲へ移住した。ハルビンへ移住した後、就職難という問題に直面し、異郷をさすらうという苦境に陥る可能性があつた。幸い最後に落ち着いた仕事を見つけることができた。日本人の亮造夫婦はハルビンでともかく安定できたのは、「満洲国」の支配民族の一員としての立場にたてたからだろうと推測する。では、在満日本人はどのような仕事に従事していたのだろうか。吉田忠雄の調査によれば、開拓農民以外に、満鉄社員及びその関連事業従事者がある。そして、「満洲国」の官吏として働いた日本人がいた。また、在満企業へ日本の本社から派遣された日本人幹部や職員もいた。さらに、日本人商人がいた。日本が敗戦となつた時に、在満日本人は約150万人いたと言われる。<sup>19</sup>この膨大な数の中に、「支配民族の一員」といっても大部分は庶民であつた。亮造夫婦もその集團の成員として満洲のハルビンという土地で暮らしていたのである。

次に、以上の引用文のように、庶民である亮造夫婦は衣食住の問題が解決した後、「満洲の人間になれそうだと」、現在の生活に対して大した悔いもなく、かえって安堵と信頼という本音を吐いた。その上、他国者として「満洲国」で生活しているという意識を持った。しかし、この「満洲国」の土地に馴染み、自分のものとしていきたいという姿勢をも示した。それゆえに、亮造の多少の意識的な努力と、美保のハルビンに対する愛着が夫婦の気持ちを落ち着かせた。要するに、亮造は自分が日本人であるという身分を認識しながら、満洲の人間になりたがっていた。亮造がそのようなアイデンティティクライシスに陥ったのは、「満洲国」における「五族協和」、「王道楽土」という「建国」のイデオロギーの宣伝に関係があると思われる。ただし、亮造を代表とする在満日本人は、その建国イデオロギーに対して「そうなりたい自分」、すなわちポジティブ・アイデンティティを持ったため、満洲で暮らしていた彼らに「満洲国」に対する帰属感を感じさせたのである。これは当時の政治宣伝が、在満日本人に対してある程度の効果があったことを示していると言えよう。

最後に、在満日本人のポジティブ・アイデンティティと比べて、「五族」に入れなかった白系ロシア人は「満洲国」における外国人として、アイデンティティクライシスに陥らなかった。しかし、彼らはネガティブ・アイデンティティを持ったと考える。満洲における白系ロシア人は、自分たちを流離の一族と認識し、明日への希望が見出せない状態が続いた。それゆえに、このような比較を通して、支配民族の一員としての日本人は「満洲国」での生活の優位性が明らかになるのである。<sup>20</sup>

以上に述べたように、日本の内地での苦しい境遇を逃れ、「満洲国」へ移住した日本人は支配民族の一員として、優位に立ったため、生活の面において、ほかの国・民族の人間よりも楽であったと考えられる。そして、当時の政治宣伝を受けて、在満日本人はより積極的かつ意識的にこの土地に馴染み、アイデンティティクライシスに陥っても、ポジティブ・アイデンティティを持つことができた。そうすることで、彼らは「満洲国」での安定感と帰属感を得たのだと思う。

#### 4. 時代に必要とされる青年たち

「風俗國課街」という作品の結末部分において、当時の日本人の青年たちが

前線へ赴く必要があったため、その見送りというエピソードが描かれた。妻の弟が前線へ赴く必要があったことで、傍観者としての立場から亮造には次のような考えが浮かんだ。

亮造は二人の短い言葉のやり取りを聞きながら、何の大した屈託もなくまるで隣りへでもゆくやうに気軽に前線へ飛びだして行ける啓助を見て、煩はしい係累の有無とか、年齢の差別とか、性質の相違とか云ふもの以上に、なにか違つた氣質がこの最近のむつかしい時局に遭遇した青年たちのうちには、生まれて来てゐるのではなからうかと思つたことである。これは亮造自身の啓助ぐらゐの年輩の時代には、それ程強くは自覺されなかつたものであつた。そこには何か民族の宿命とでも言つたものを無意識のうちに背負ひ、そしてそれに驅りたてられて、何の躊らふところもなく幕地に生死の境を踏み越へてゆく新しい時代の人間の姿が感じられるのだつた。亮造は満洲に来てから、殊に多くのさう云ふ青年たちを見た。自分と幾つも年の違はないその人々の姿に、亮造はただ駭き衝たれ、眼を睜るばかりだつた。そして日頃、我儘な勝手坊主の厄介ものやうにしかみえない啓助が、いつか矢張りかう云ふ時代に必要の一人になりすましてゐることに気がついて、思はず亮造は自分の心のうちに狼狽に似たものを感じると同時に、多少の羨望といつた風な感情をさへ味はされたのだつた。（「風俗國課街」、144頁。）

以上のような場面の起因は、作品によれば、西南の「国境」に近いあたりで突発した「政治的問題」で、急に応援を求めて来たためであつた。それは、歴史的に見て、1939年5月－9月、中国東北地方とモンゴル国の国境にあるノモンハンで起こつた日本軍とソ連軍が直接対決した衝突事件であつたと推測される。ノモンハン事件は、日本では日本軍の大敗と認定された。そして、その2年前の1937年7月には、中日戦争が勃発していたこともあつて、状況が非常に緊迫していたと言われている。

また、作品によると、困難な時局に遭遇した日本人の青年たちは、無意識に民族の宿命を背負ひ、時代に必要とされていると覚悟した。このような認識は、「満洲国」における「思想戦」に影響されていた可能性が高いと思われる。それゆえ、当時の「思想戦」の意義を確認しておく必要がある。清水亮太郎は中日戦争の開始に前後して、「満洲国」において頻繁に用いられた「思想戦」という語の包含する三つの意義について、以下のように述べている。

まず「基本思想戦」とは、思想戦の基本として国民生活の原理を振起しつつ生活それ自体のなかに包蔵する情操的意欲的なものとして、自国の主義主張の優秀性への認識、内省的批判にもとづく。第二に「平時思想戦」とは、基本思想戦によって与えられた学説理論が対内的反省から対外的比較検討に進められ、他日の外国との戦争を意識し、その準備として行われるものであり、対立する世界観ないし主義主張を克服せんとする。さらに一歩進めたものとして、第三の「戦時思想戦」は、宣伝機関、宣伝組織の整備を要求すること切実であり、第一および第二の思想戦と関連して急速に発展を遂げんとするもので、戦時または戦前の急迫した環境においては、この意義の思想戦がもっともその真価を発揮する。<sup>21</sup>

つまり、作中の啓助のような日本人青年たちは、幼い頃から上記の思想を教え込まれていたことが分かる。彼らには選択の余地がなく、時代の犠牲者であったと考えられる。竹内正一も、そういう考えを持っていたのであろう。なぜかという、作品中に見送りの場面が描かれているが、見送り後の夜更けの静けさも強調されているからである。このようなシーンのコントラストを通して、前線へ赴いた青年たちを心配する感情や戦争に対する不安という気持ちなどが混在していたことを示唆している。さらに、支配民族の一員であっても、普通の人間としては、その難を免れられなかった。このような当時の仕方がなく、かつ不満な気持ちが作品に表現しているのである。

1941年、太平洋戦争が開始されたのに際して、戦時の必要性ため、日本は「満洲国芸文指導要綱」を公布した。それによって、「満洲国」での芸文活動に対する統治が強化された。本来戦争に関する場面を作品に入れなかった竹内正一も時局に迎合する必要があったため、創作も国策文学というスタイルに変わった。しかし、1942年に出版された「風俗國課街」を通して、戦乱の状況に置かれていた普通の人間にとって、植民主義者であれ、植民地の人間であれ、生命、自由への権利を自ら握ることができなかつた人々の物語を描くことを通して、この作品には竹内正一の戦争への批判と反省とを窺うことができるのではなかろうか。

## 5. おわりに

本研究では、まず、満洲におけるハルビンと日本人の繋がりを説明するため、竹内正一の「風俗國課街」を通して、満洲へ移住した日本人の経緯を簡

単にまとめた。そして、日本人にとって「北の窓」としての国際的多文化的なハルビンの当時の情勢を紹介した。このような背景の下で、日本文学者の竹内正一は「満洲国」の都市としてのハルビンで10年間くらい暮らしていた。それゆえに、彼が創作した作品は主にハルビンを中心として展開した。

次に、竹内正一の「風俗國課街」という作品を通して、「満洲国」時代、同じハルビン市内であったというのに、埠頭区と南崗地区に大きな違いがあったことが分かる。その上、南崗の馬家溝方面のロシア式な国課街の表象を浮き彫りにすることによって、ロシア人が満洲移住に伴い、彼らの文化をハルビンに移植することに成功であったことを示している。さらに、主人公の日本人には馬家溝で「異国感」という感覚が生じたことから、ハルビンにおける異国或いは異民族の人間をもたらした文化が分裂状態になっていたと明らかにしている。

また、日本での苦しい生活を逃れた日本人たちは「満洲国」へ移住し、支配民族の一員として、普通の人間であったとしても優位に立つことができた。それゆえに、「満洲国」での生活面において、他民族の人間より楽であったと考える。そして、彼らは他国者として「満洲国」で生活しているという認識を持った。しかし、「満洲国」の土地に馴染み、自分のものとしていきたいという姿勢も示した。当時の政治宣伝を受けて、「満洲国」へ移住した日本人は民族的・国家的アイデンティティクライシスに陥ったと思われる。ただし、「満洲国」における白系ロシア人が持った明日への希望を見いだせないネガティブ・アイデンティティとは違い、在満日本人が持ったのはポジティブ・アイデンティティと言える。それゆえに、彼らを代表とする在満日本人は「満洲国」での安定感と帰属感を得られたと推測する。

最後に、戦乱の状況に置かれていた普通の人間にとって、支配民族の人間であれ、非支配民族の人間であれ、生命、自由への権利は自ら握ることができなかった点について、このような仕方がなく、不満な気持ちを竹内正一は作品によって示している。「風俗國課街」は「国策文学」ではあるが、そこには竹内正一の戦争への批判と反省をも窺い知ることができるのではなかろうか。

竹内正一は従来「満洲国」における普通の人間に注目し、現実と結びついた文学作品を執筆した。竹内正一における現存の作品の収集に伴って、「満洲文学」に関する研究に値する部分の余地を更に補充することができる。それ

ゆえに、竹内文学に関する研究は更に続けなくてはならない。

付記：この論文は未公刊の博士論文の一部である。

注：

本稿における「風俗國課街」からの引用はすべて複製資料の『新潮』[マイクロ資料]第39年9号、新潮社、1942年9月1日(日本近代文学館、1975)による。傍線はすべて稿者による。

<sup>1</sup> 民族や国民などの集団が歴史の転換期に、自己認識の混迷に陥ること。参考：松村明『スーパー大辞林3.0』(三省堂)

<sup>2</sup> 吉田忠雄『満洲移民の奇跡』(〔有〕人間の科学新社、2009年)128-129頁。

<sup>3</sup> 塚瀬進『満洲の日本人』(株式会社吉川弘文館、2004年)36-37頁。

<sup>4</sup> 吉田忠雄『満洲移民の奇跡』(〔有〕人間の科学新社、2009年)129頁。

<sup>5</sup> 『満洲開拓政策関係法規』(大東亜省満洲事務局、1943年)1頁。

<sup>6</sup> 吉田忠雄『満洲移民の奇跡』(〔有〕人間の科学新社2009年)146頁。

<sup>7</sup> 山本有造『「満洲」記憶と歴史』(京都大学学術出版会、2007年)142頁。

<sup>8</sup> 参照：『民生部調査月報』(満洲行政學會、1937年5月)104頁。

<sup>9</sup> 同上、104頁。

<sup>10</sup> 呉佩軍「竹内正一が描いたハルビンの都市表象－『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』を中心に』『跨境日本語文学研究06』(笠間書院、2018年)85頁。

<sup>11</sup> 竹内正一は『作文』の代表的な作家で、「満洲国」時代有名な著者であった。父竹内坦道は明治の末に「満洲」へ行き、『満洲新報』大連支社長を勤めた。竹内正一は1902年6月12日に大連市に生まれ、大連で小学校を卒業し、1921年3月に順天中学校を卒業した。その後、1926年に早稲田大学佛蘭西文学科を卒業した後「満洲」へ行き、南満洲鉄道に入社し、大連図書館に勤務した後、1934年1月にハルビン満鉄図書館長となった。そして、北鉄接収により1936年4月に濱鉄路図書館主事となった。更に、1943年2月に満鉄副参事に昇格し、同年2月の関東州読書協会創立総会で連絡部長となった。1944年11月12日には第三回大東亜文学者大会に古丁とともに満洲国代表として参加した。1945年2月に満鉄を退社し満洲出版文化研究所常務理事に就任したが、同年8月に引き揚げた。1974年3月10日に竹内正一は亡くなった。

竹内正一の紹介のご参考は以下の研究成果報告書による。岡村敬二研究代表者：『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書平成21年度－平成23年度(京都ノートルダム女子大学人間文化学部、2012年3月)134頁。

<sup>12</sup> 岡田英樹「竹内正一論」『立命館文学』(立命館大学人文学会、2002年)587-588頁。

<sup>13</sup> 竹内正一、前掲「風俗國課街」132頁。

<sup>14</sup> 参照：约翰史蒂芬著 刘万钧等编译『満洲黑手党－俄国纳粹黑幕纪实』(黑龙江人民

出版社、黒龍江省新华书店发行、1993年1月）66-67頁。

<sup>15</sup> 同上、126頁。

<sup>16</sup> 呉佩軍「竹内正一が描いたハルビンの都市表象－『ギルマン・アパート点描』『馬家溝』を中心に』『跨境日本語文学研究06』（笠間書院、2018年）91頁。

<sup>17</sup> 平山剛「満洲房産株式会社の住宅供給事業」『アジア経済』第53巻第5号（日本貿易振興機構アジア経済研究所、2012年5月）60-61頁。

<sup>18</sup> 竹内正一、前掲「風俗國課街」134頁。

<sup>19</sup> 吉田忠雄『満洲移民の奇跡』（〔有〕人間の科学新社、2009年）146-147頁。

<sup>20</sup> アイデンティティに関する参考：有末賢「戦後日本社会のアイデンティティ論－重層的アイデンティティに向けて－」『法学研究』77（1）（慶應義塾大学法学研究会、2004-01）77-102頁。

<sup>21</sup> 清水亮太郎「満洲国統治機構における宣伝・宣撫工作」『戦史研究年報』（17）（防衛省防衛研究所、2014-03）71頁。